

戦後の在日華僑文化の一考察 伝統の観光利用と国際関係における変容

A Study of the Culture of Chinese Living in Japan at the Post-war Period : Use of Traditions for Tourism and Changes in the International Relations
MATSUO Koichi

松尾恒一

現代、華僑華人の集住地である長崎、神戸、横浜等の中華街（南京街）では、彼らの商売繁盛等の祈願する神霊として関帝に対する厚い信仰をみることができる。神戸・横浜には関帝廟が建立され、長崎では、近世期に開創された崇福寺をはじめとする唐寺に関帝が祀られている。

関帝とともに多くの華僑華人の信仰を受けるのは、航海安全を約する女神媽祖神である。長崎には唐寺内に媽祖堂が建ち、神戸には関帝廟内に祀られており、横浜では二〇〇六年（平成一八）に媽祖廟が建立された。

関帝誕・媽祖誕等の年中行事においては、華僑華人が三牲（豚（猪）・鶏・魚）等の供物を捧げ祈願する点で、長崎、神戸、横浜共通しているが、長崎の唐寺では、僧侶による黄檗宗の儀軌に基づく法要が行われることなど、各地域での差異も見られる。

横浜の中華建築の壮麗な横浜関帝廟・媽祖廟には、平生でも多くの観光客を含む参拝者が訪れるが、長崎、神戸、横浜のいずれにおいてもイベント化された伝統の正月行事「春節祭」には獅子舞や舞踊をはじめとする中華の伝統（的）芸能が披露され、期間中数万を超える観光客が訪

れる。

本稿は、日本における外国（人）の伝統文化の実態と特質についての一考察として、華僑華人の信仰、祭祀と、その現代的な変容として、観光活用等に注目して検討する論考である。

ところで、戦後、一九四九年に、共産党政権により、北京を首都として中華人民共和国が建国されるとともに、中国と、台湾を領する中華民国とが実質的に分裂することとなり、それとともに在日華僑も、大陸政府派と国民党（台湾）政府派との間に対立や葛藤が生じることとなった。横浜には中華学校として、中華人民共和国系の横浜山中中華学校と台湾（中華民国）系の横濱中華學院とが存するのは、その顕著な様態であるが、両者の対立は関帝廟の祭祀といった信仰に関わる活動にも影響を与えている。

本稿では、こうした政治的な状況―日本・中国・台湾の関係―をも考慮しつつ、日本における華僑華人の信仰・祭祀の現代の状況についても考える。

一、菩薩上げ―長崎における媽祖信仰と祭祀

現代に続く、日本の華僑華人社会のうち、もともと長い歴史を有するのは長崎で、近世の鎖国時代、日清交易により唐船により訪れた清国人の居留地唐人屋敷や、唐寺に始まる。

清代の長崎との関係は、浙江・寧波・福建・広東等からの民間商人との交易で、同時代、琉球国が清に朝貢し、国交を結んでの交易を行ったのと対照的であった。

彼ら清国商人の交易圏は、東アジアのみでなく、インドから、カンボジア・ジャカルタ・シヤム等、東南アジアにまで広域に及んだが、唐船は、風を動力として走る大型帆船（ジャンク船）で台風・嵐等により遭難、漂流、破船することも稀ではなかった。また、満州族の建国した清朝は、台湾を拠点として漢族による民国を再興しようとする鄭氏政権に対抗するため渡航を禁ずる海禁策を一六八四年（康熙二三）まで敷き、すなわちこの間の清国からの船は役人の厳しい監視の目を潜り抜けて出港してくる密貿易船であり、また、海上では同国人及びオランダ・日本等の海賊の危機にもさらされていた。

こうした苦難に満ちた航海を強行したのは、外国との商売が彼らに莫大な利益をもたらしたからであるが、唐船には媽祖像が安置され、航海中、船上では日々、航海の安全を祈願する、媽祖への祭祀が営まれた⁽²⁾。

唐船は、長崎港に到着すると碇を下ろし、梯舟に荷を積んで港に運び込み、荷を解いて商品となる積荷の検査を受けなくてはならなかった。また、彼らの出身地、航海の状況、清国の国情について聴取を受けた後、唐人屋敷に赴き、居留するが、信仰上、重要なのは、船に安置されていた媽祖像を降ろすことであった。『華夷通商考』巻二「四川省」には、次のようにあり、長崎を訪れる唐人が、媽祖を観音の化身と信仰し、「天妃」「聖母」と崇め、「菩薩」と呼んでいたこと、港に入り、他の唐船と

出逢うと、その先後により、礼旗の上げ下ろしによって、互いに譲り合う作法があったこと、積荷を港に運び込んだ後、媽祖像を船より下ろし、また出帆の際には媽祖像を船に安置するが、媽祖を捧げ運ぶ道すがら、金鼓を叩き鳴し、ラッパを吹き鳴らしたことが記されている。

長崎ニ來ル唐人船菩薩ト號スルハ第一媽祖ナリ、姥媽共號ス。本福建興化ノ林氏ノ女、大海ニ沒シテ神ト成、神異靈現ニシテ渡海ノ船ヲ護ル、天妃ノ尊號ヲ諡ス、又ハ聖母ト號ス。觀世音ノ化身ト云。（中略）又觀音ヲ信ズル者多シ、長崎ニ來ル唐船津口ニテ必ズ石火矢ヲ放ツ。碇ヲ入レバ必ズ金鼓ヲ鳴シテ祝クナリ。津内ニ類船アレバ、禮旗ノ上ゲ下シニ、必ズ先ニ到レル處ノ船ニ禮讓シテ後、金鼓ヲ鳴シテ禮旗ヲ納ムル法ナリ。又同津ノ中一船荷役ノ後、菩薩ヲ船ヨリ下シ、又ハキ帰帆ノ時、菩薩ヲ乗スル事アレバ、最モ路次スガラ金鼓ヲ鳴シ、喇叭吹事ナリ。既ニ其船ニ到リヌレバ、湊中ノ類船盡ク金鼓ヲ鳴ス事、三々九遍、帰帆既ニ碇ヲ揚、石火矢ヲ放チ、金鼓ヲ鳴ストキモ、湊中ノ類船皆各三々九遍ノ金鼓ヲ鳴シテ出帆ヲ祝フノ禮法アリ。唐土ノ風俗ナリ。

『華夷通商考』には、こうした慣行は清の風習だと述べているが、金鼓、ラッパの音楽を奏し、異国の装束で、上に傘を翳した媽祖を捧げ、「天后」「聖母」と書かれた提灯を持った役が先導して、長崎の街中を行列する彼らの様子は、『長崎名勝図絵』『唐人奉天妃』や『長崎古今集覧名勝図絵』『菩薩祭』『唐館蘭館図絵』に見ることができるが、奏樂にも意匠にも日本人はエキゾチックな珍しさを感じたことであろう。

『閩省水師各標鎮協榮戰哨船隻図說』（清代、ベルリン国立図書館蔵）に図解された唐船図には、船体内に媽祖像を納め祀る「媽祖龕」が図示されており、また、後方には「媽祖旗」が掲げられている様子を見るこ

とができる。

この媽祖龕より、日本に停泊中、媽祖を下ろし、居留地となる唐人屋敷、あるいは唐寺に安置され、彼らの長崎滞在中、祀られたのである。『長崎名勝図絵』には、長崎の市中を、『唐人屋敷景』（国立歴史民俗博物館蔵）【図1、2】には、唐人屋敷内を行列する様子を見ることができ。

清国の商人は、これまで見てきたように、福建、上海、浙江、広東、台湾等を主たる出港地とし、来日後も同郷者どうしの結びつきが強く、それぞれ次の唐寺が、同郷者によって建立され、商売を中心とする交流の拠点として重要な役割を果たした。

- ・崇福寺（福州寺）…福建省、北部
- ・興福寺（南京寺）…上海、浙江省
- ・福濟寺（泉州寺（漳州寺））…福建省南部、台湾
- ・聖福寺…広東省

唐寺が建立されたのは、日本側の事情としては、江戸幕府のキリシタン対策を目的とする寺請制度によるもので、清からの商人にキリシタンがいることを警戒していたことが知られる。崇福寺・興福寺・福濟寺の三寺は、一六五四年（承応三）、福建から隠元

禪師が、鄭成功の仕立てた船によって長崎より来日して以降、黄檗宗となり、また聖福寺は、隠元の孫弟子鉄心道胖を開山として建立された。

これら四寺を中心に同じ出身者同士の相互扶助組織である「幫」が、近世中期（一六五〇年頃）までに形成され

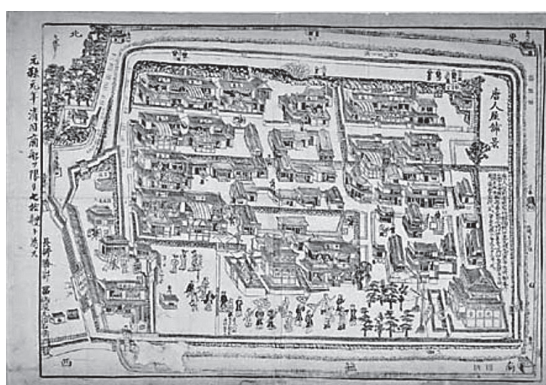


図1 『唐人屋敷景』

（近世、元禄以前、国立歴史民俗博物館蔵 H-25）

若干手彩色の単色に近い版画 富嶋屋文治右衛門板（長崎県立図書館所蔵のものは文錦堂板）余白に「元禄元年清国商船ヲ限り七拾艘ト為ス」と墨書あり唐人屋敷の様子がかなり詳細に描かれ、日本と中国の交渉の一端をうかがい知る資料。元禄二年に在留中国人は長崎の一定区域に居住させられるようになった。本図はその様子をよく示している。大門の周辺を除いて館内（居留地）はカラタチの生垣に囲まれ、その中にさらに塀が囲われている。カラタチと塀の間は空壕になっており、容易に出入りができないようになっている。中央下部の行列は菩薩あげ（入船祭）の行列である。その外、外部から館内に入っている遊女、桶を肩にした物売りなどが描かれている。

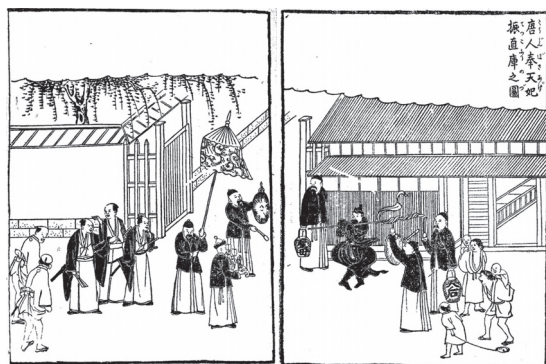


図2 『長崎名勝図絵』（近世）祖行列の様

たが（崇福寺の三山幫、興福寺の三江幫、福濟寺の漳州幫、聖福寺の広州幫）⁽⁴⁾、福州の出身者によって組織されている「三山公幫」^{サンサンフンバン}は、長崎における現存する唯一の幫である。「三山」とは福州を意味する語で、「三山公幫」は、長崎華僑の中でも旧福州府出身者の、主として、崇福寺の行事に奉仕する祭祀組織であるが、そのもととなった福州幫は一六二九年に創設され、一八五〇年に福建幫になり、さらに一八七八年（明治一一）、大浦に清国領事館が開設された約二〇年後、一八九九年（明治三二）に「三山公幫」となり、日中戦争、第二次大戦の両国の関係の悪化の時代を乗り越えて現在に続いている。

崇福寺では、現在、三山公幫により、旧暦三月の媽祖誕のほか、元宵節（旧暦正月）、普度蘭盆勝会（旧暦七月）等が伝承され、僧侶による法要も営まれている。媽祖へは、寺院でありながら、それぞれの行事に



図3 崇福寺普度蘭盆勝会において、福建華僑の同郷会「三山公帮」が調備して捧げられる媽祖神への供物。左の神像は千里眼、右は順風耳。
(撮影：松尾、2015年9月)

において三牲（豚・鶏・魚）をはじめとする供えが、三山公帮により行われている【図3】（二〇一三～二〇一五年、松尾の調査に基づく）。崇福寺以外の唐寺では、それぞれの出身地の華僑がほとんど消失した。清朝商人との交易の窓口となっていた長崎には、崇福寺以外に、上海・浙江省出身の華僑の拠点となった興福寺（南京寺）、福建省南部・台湾の華僑の拠点となった福済寺（泉州寺・漳州寺）、広東省出身の華僑の拠点となった聖福寺があり、これらは崇福寺を含めて「唐寺四福寺」と総称されてきた。しかしながら、近代に開国後、福建福清の華僑以外は、より大きな商売ができると考えて神戸や横浜に移住し、あるいは日中戦争・第二次世界大戦等、日中関係の悪化時に帰国し、このことより、崇福寺に奉仕した三山公帮以外は、華僑檀家はほぼ消失した。三山公帮が現在まで存続したのは、彼ら、日本国内においては主に反物行商に従事した福建福清の華僑は、広東出身の華僑にくらべて比較的貧しく、神戸・横浜に移住する資金を持たず、また、五島列島等、長崎周辺の地域から長崎に出稼ぎに来る貧しい日本人女性と結婚し、家庭を営むケースも多く、このことより長崎において定着したのだらう、と語る長崎華僑は多い。崇福寺以外の長崎の唐寺には、媽祖への祭祀だけでなく、華僑が主体となる行事は伝えられず、三山公帮という同郷組織が続き、道教的、清代

近現代の中国の民間祭祀が、崇福寺に伝えられていることは特筆される。⁽⁵⁾

二、長崎華僑の戦前・戦後と社会復興―華僑文化の観光活用

春節を観光行事化したランタンフェスティバルは、現在、長崎市を主体とする一大行事として開催されているが、その母胎となったのは、新地中華街の春節祭であった。二週間に及ぶフェスティバルは、崇福寺における旧暦正月十五日の元宵節を最終日として終結する。開催費として、長崎市他からの約一億円の支援を受け、本期間一六日間だけで一〇〇万人超の来場、約一〇億円の経済効果を生む（二〇一三年（平成二五）長崎市観光統計）、伝統行事の観光活用、経済的な成功の代表例である。これほどの規模ではないが、崇福寺の媽祖祭祀「天上聖母生誕（媽祖誕）」、先祖供養の「普度蘭盆勝会（通称「ポール」）」等、近世以来の華僑の伝統行事も観光客へのPRがなされ、華僑や檀信徒だけでなく、観光客をも受け入れている。

一九四五年（昭和二〇）、長崎へのアメリカによる原爆投下は長崎に壊滅的な打撃を与えるが、この前年（一九四四）より、三菱造船所などが置かれた長崎は攻撃目標となり、B 29、B 24、B 25等による一回に数十～一〇〇トン超の爆弾の投下による、五回もの空襲を受け、一度に数十～数百の死傷者・行方不明者、数十～百戸超の全半壊の被害を受けている。

原爆投下後、家を焼失し、被災した華僑は、崇福寺を避難所としたという（長崎華僑からの聞き取りに基づく）。崇福寺境内には、普度蘭盆勝会をはじめ、全国より集まる福建華僑が寝泊まりできる二階の方丈が建てられており、現在も使用されているが、一般家屋にくらべて堅牢な堂舎、宗教施設が、戦争時の被災者の緊急避難所として解放、活用されたことは注目される。

現代の高齢の華僑にはこうした苦境を自身で経験し、あるいは祖父母

の体験を聞いている人々も少なくない。特に華僑の場合は、戦後も、祖国中国の、国民党政府（中華民国、台湾）と共産党政府（中華人民共和国）との分裂といった政治動向が、彼らの生活、華僑組織・団体や心意に少なからず影響を与え、唐寺や孔子廟管理、あるいは華人学校の運営・教育もこうした影響と無縁ではなかった。

在日華僑の現代については、文化人類学・社会学の立場からのフィールドワークによる華僑華人やその文化のエスニシティに注目した研究や、学校の制度や教育、その変遷を明らかにした教育学からの研究の蓄積があるが、本節は、私の、この三年間の七〇歳代以上の華僑の方々からの聞き取りに基づく考察である。⁽⁷⁾

長崎の戦後復興、特に経済面での再生は長崎県商工経済会が主導した⁽⁸⁾が、長崎華僑の商売再建の上で、大きな力を果たしたのは、アメリカからの特配（特別配給）であった、と記憶する華僑は少なくない。

アメリカと中国とは、日本を敵国とした戦勝国どうしとして、アメリカから中国への特別配給が、戦後一二年間、行われ、それは、日本に在住した華僑に対しても実施されたという。このことは長崎だけでなく横浜華僑からも聞くことができる（横浜華僑からは、二〇一五年六月、横浜での父親が広東出身の二世華僑からの、松尾による聞き取り⁽⁹⁾）。

アメリカ占領軍による華僑への配給物資は、小麦・砂糖・綿布・衣料品等生活必需品で、特にバイナップル等のドライフルーツは珍しく、嬉しかったという。長崎では、特配は、中華学校である時中小学校の校庭で行われ、また華僑間の申し合わせにより、子弟を時中学校に通学させている家庭にのみ配給を受けられるようにし、このため、いつとき公立校より時中学校に転校させる華僑の家庭もあったという。

現在は、貸店舗となっている、かつて中華料理店を一世華僑である親（福建出身の父親は来日当初、理髪業、タバコ販売等に従事、母親も福建華僑）の代から経営していた二世の福建華僑の一人は、米軍から配給

された小麦によりチャンボン玉を作り、チャンボンを店で供することができたこと、日本人経営の麵製造業者や中華料理店にチャンボン玉を分けたこともあったと語る（一九四二年（昭和一七）、長崎生れ）。戦前、特に物資に窮乏した戦中は、日本の同業者に頼んでチャンボン玉等を融通してもらっていたが、戦後のいつとき、戦勝国となったこと、アメリカからの配給により日本人より困窮度が低かったことで、日本人に対して優位な立場になったことを実感したという。彼らは、特に日中間の関係の悪化とともに、日常生活の中でも嫌な思いをすることが少なかったが、戦後、優位な立場に感じることがあっても、特に辛くあつた日本人に対して仕返しなどしないよう、華僑どうし申し合わせたと語る。

特に新地では、中華料理店を再開、あるいは新たに開業するものも少なくなかったが、中華料理は、日本料理に比べて強力な火力が必要で、そのため工夫もあった。戦後の復興期で、建築材から大量の大鋸屑が生じ、燃料としてこの大鋸屑が、容易に入手できたが、大鋸屑により強い火力を得るのは難しかった。その克服として、竈に効率よく空気を送り込むことにより、中華料理を料理するのに十分な火力を得る方法を考案した華僑がおり、その方法は、少なくとも長崎華僑の間に広まり、プロパン等、ガス燃料が普及するまでの間、活用されたという。

高度経済成長期を経て、戦後の新地中華街の振興、発展の大きなエポックとなったのは、一九八六年（昭和六一）、新地中華街の風水に基づいて東西南北に建立された中華門の完成である。この二年前、一九八四年（昭和五九）に「長崎新地中華街商店街振興組合」が設立されるが、このとき新地中華街在住の華僑の大多数は、福建省福清市とその周辺出身者の二、三世であり、そのコネクションより福州市から屋根瓦等、資材を取り寄せ、職人を招いて築造された。

東西南北の四至に建立された中華門や、中華風の赤色の店舗は中国

をイメージさせるシンボリックな建造物であるが、中華門建立の翌年、一九八七年（昭和六二）に、建立一周年記念として春節祭が行われた。これより、新地中華街の春節祭は恒例行事となるが（一九八九年（昭和六四）平成元）のみは昭和天皇の崩御のため中止、一九九四年（平成六）より長崎市が参画し、「ランタンフェスティバル」と改名して開催され、現在に続いている。

長崎市の春節祭への参画、協力へのステップとして、注目されるのは、この四年前、一九九〇年（平成二）に長崎旅博覧会が開催され、このとき中華門や中国風の庭園が造られ、またイベントとして中華大婚礼が開催されたことである。この年の長崎市の観光客数は例年を五〇万人以上上回る六二八万人（前年一九八九年は五六八万人、翌年一九九一年は五五四万人）、平成25年長崎市観光統計」に基づく）で、大きな成功を収め、こうして、長崎市が関与、協力しての、地域の中華文化の活用に大きく踏み出したことがわかる。

春節祭よりランタンフェスティバルに変わり、長崎商工会議所会頭が実行委員長を務め、事務局は長崎市観光課に置かれる「長崎ランタンフェスティバル実行委員会」が主催して行われるようになる。新地中華街は、春節祭の第一回目より五〇〇万円の協賛金を支出し、ランタンフェスティバルになって以降は、長崎市が六〇〇万円、商工会議所会員からの協賛金として約四〇〇万円、計約一億円が拠出され、これに対する利益は約一〇〇億円にも及ぶ。

ランタンフェスティバルでは、長崎新地中華街をはじめ、湊公園、中央公園、眼鏡橋周辺、浜市・観光通りアーケードなど長崎市内の中心部に約一五、〇〇〇個にも及ぶ赤色の中国提灯や、ねぶたを思わせる大型ランタンのオブジェが飾られ、街を彩る。

この大型、人形のランタンは、もと台湾の美術の教師であった林健治氏に依頼して製作されたもので、現在では中国珠海の工場で林氏が製作

している。一九九八年（平成一〇）からは、干支をテーマとするメインオブジェが年ごとに作られるようになり、新たな年を祝うようになった。期間中には、新地中華街、及び周辺を会場として、龍踊り、中国雑技、二胡演奏など、中華の芸能が演じられるが、本稿でテーマとする媽祖信仰との関わりで看過できないのは、期間中、媽祖行列が行われることである。

前節でみたように、近世には、唐船に乗せられた媽祖を、唐寺、あるいは唐人屋敷に行列して運び（「菩薩揚げ」）、船が長崎に停泊中、ここに安置し、帰航の際には、行列して船に運び、船中の祭壇に安置する祭儀（「菩薩乗せ」）が行われた。媽祖行列は、その、歴史を再現する一大行事で、菩薩揚げは、孔子廟を出発地として「唐人屋敷→湊公園→眼鏡橋→興福寺」の道順で、菩薩乗せは、逆の道順で興福寺より唐人屋敷に戻る。輿に乗せられ担がれた媽祖に、清代の衣装に身を包んだ従者から成る華やかな大行列を見ようと、道の両側には見物客が溢れる。媽祖神に関わる信仰（的）イベントとしてまた、看過でき



図4 2015年ランタンフェスティバルにおける「土神堂・福建会館・天后堂・観音堂、四堂めぐり」のチラシ(個人蔵)

ないのは、唐人屋敷会場として「四堂めぐり」のコースの案内が掲げられることである。四堂とは、近世期の唐人屋敷に建てられ、近代に再建された土神堂・福建会馆・天后堂・観音堂のこと、この順に各堂を訪れ、祭神に中華風の太い赤蠟燭を灯して祈り巡るものである【図4】。「四堂めぐり」は、日本の七福神巡り等の巡拝より考案されたものと推察され、唐人屋敷の復興と観光活用を目指した期間中の催しである。

ランタンフェスティバルより離れるが、媽祖と長崎の伝統行事との関わりとして看過できないのは、長崎くんちにおける「唐船祭」である。踊町のひとつ元船町の演し物であるが、作り物の唐船には媽祖のほかに、船首には媽祖に使える千里眼・順風耳の二神も乗せられ、航海安全を期して渡海した様相が表現されている。元船町は、一九〇四年に大波止海岸前の海を埋め立てて作られた町で、長崎港開港当時は、唐蘭船の寄港する大きな波止場であり、このことに由来する町名である。奉納踊りでは、「唐船祭」として、清代の衣装をまとった子どもによる明清衆の舞が披露されて、異国情緒が人々を喜ばせる。

ランタンフェスティバルにおいて、信仰の観光活用として注目されるのは、月下老人のランタンのオブジェである。月下老人は、中国で男女を結びつける縁結びの神として知られ、この脇には、期間中に売られる、男女を結びつけるとされる赤い糸（中国では「赤縄」）が売られ、買った人々は赤い糸に祈りを込めて、月下老人の脇に結んでゆく。この赤い糸は崇福寺で、ランタンフェスティバルの最終日となる元宵節において僧侶によるお焚き上げがされて、祈りが天に届けられる。

ランタンフェスティバルは、春節祭を核として、市からの大きな資金援助を受けて、中華文化に基づく現代的な、あるいは、媽祖行列といった歴史を再現したイベントを連日にならべて繰り広げ、元宵節といった近世来の華僑が伝えてきた伝承儀礼も組み込まれる一大イベントとして定着している。

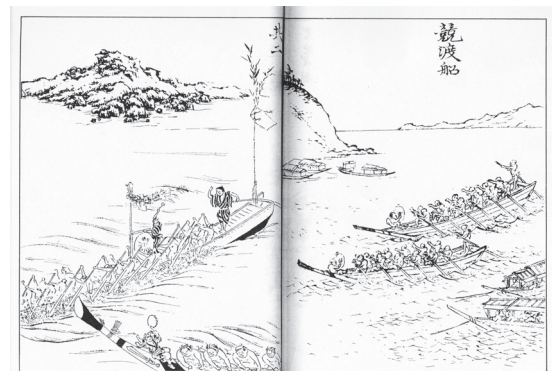


図5 『長崎古今集覧名勝図絵』近世の長崎のペーロン



図6 現代の観光行事として開催される港祭りにおけるペーロン（撮影：松尾、2014年7月）

ランタンフェスティバル、あるいは、近世に清より伝えられた龍船競争「ペーロン」を観光行事化した港祭り【図5、6】等は、新地中華街商店街振興組合や商工会、長崎市等の大きな経済支援とアルバイト、ボランティア等を組織する運営に支えられるところが多い。その一方、福建ネットワークの要として機能してきた普度蘭盆勝会等の崇福寺の祭祀は、近世より継続する福建華僑の組織「三山公帮」を中心とする、華僑の信仰と熱意が支え続け、現在なお、九州諸地域だけでなく、全国各地の福建、特に福清出身の華僑のコミュニティとして重要な役割を果たしている。

三、現代、日本列島における媽祖と日中台関係

列島内の外国人とその子孫たちによる伝統の継承と、その歴史が、地域の観光資源として再編される様相、戦後の、商業的な発展に貢献した歴史、文化の活用の現在を辿ってきたが、現代の国際関係のなかで、政

治的な状況と関わって眼前に現れる信仰や宗教を背景とする表象にも注目したい。

二〇一〇年九月、尖閣列島沖で、中国漁船の違法操業の、海上保安庁による取り締まり（尖閣諸島中国漁船衝突事件）を契機として、本諸島をめぐる日中台の帰属問題が浮上し、現在に続いている。

日本は、この二年後、私有地として登記されていた尖閣列島を買い取り、国有化することによって、日本領であることを明確にした。しかしながら、中国・台湾は、それぞれ自国領であることを主張し続け、特に二〇一二年九月、中国国内の大都市（四川省成都、山東省、広東省等）では、大規模な市民による反日デモが起こり、日系・日本資本の店舗や、工場等が大きな被害を受けたことは、日本国内でも大きく報道され、多くの日本人に大きなショックを与えた。その後も、尖閣列島の領有をめぐる両国の政府レベルの抗議や海洋での軍事的活動は続いているが、民間レベル、一般人（と称する人々、団体）による抗議活動も行われている。

本稿で注目したいのは、こうした抗議活動のなかで、媽祖神を奉じての活動が行われたことである。『人民網日本語版』（中国共産党中央委員会の機関紙『人民日報』で知られる中国のメディア人民日報社が配信するweb-site）二〇一三年一月二十四日・二十八日は（<http://j.people.com.cn/94474/8106652.html> / <http://j.people.com.cn/94474/810636.html>）二〇一五年九月三〇日、松尾披見）、台湾中央社の報道や台湾行政院海岸巡防署、深澳安全検査所長への取材に基づいて、台湾の「中華保釣（釣魚島防衛）協会」の尖閣諸島をめぐる政治活動について、以下のように伝えている。

本協会は、台湾漁師の安全を加護する神霊として媽祖像を釣魚島（尖閣諸島の中国語名）に安置することを計画し、台湾「海岸巡防署」の安全検査を経て、二四日午前一時過ぎに漁船「全家福号」で瑞芳区の深澳漁港を出港した。全家福号に乗ったのは、中華保釣協会の理事長や釣魚

島防衛活動家等数名のほか、インドネシア国籍の船員一人等であった。船には、人民日報社の記者一人も乗りこみ、彼らが、自身の活動の始末を台湾・大陸だけでなく、世界に伝えようとしていたことがわかる。結果、彼らの目的は、海洋での日本の防衛のもと達成できず、損壊した媽祖を安置した小祠とともに台湾に戻った（web-site）には、その出港から帰港に至る光景、損壊した媽祖祠を乗せて険しい表情で、深澳漁港に帰着した光景等々を撮影した写真も掲載されている。

注目されるのは、彼らが、政治的な目的のもとに信仰的な表象の活用を行なっていたことである。現実の地域・空間における社会活動、特に生活を成り立たせる経済活動の表象として、宗教施設の管理の権限、祭祀の実行が、大きな意味を有しているのである。

一九八三年（昭和五八）、横浜中華街では、台湾の華僑総会事務所や関帝廟の管理を、大陸派の華僑総会が明け渡すことを求める訴訟が起こされ、裁判が一〇年にも及び、一九九三年（平成五）、原告大陸派の華僑総会の取り下げによって終結した。⁽¹³⁾

この一〇年の間には、二〇一三年、東京大久保に、日本媽祖会により台湾華僑・在日台湾人の交流の拠点となることを目的とする、四階建ての「東京媽祖廟」が建立された。主神媽祖は、三階に福建泉州天后宮より分霊した媽祖神と関帝君、二階に台湾北港朝天宮より分霊した媽祖神が安置され、その一階は、主として台湾華僑の交流のための仕事を行う事務所となっている。

一〇月一三日に行われた落慶の祝賀の様子は、日本語版『台湾新聞』（台湾新聞社、東京）二〇一三年一月四日号（No.一九九）に伝えられ、沈斯淳台湾駐日代表、詹德薰東京媽祖廟会長等の祝辞が紹介されている。沈台湾駐日代表は、台湾人の信仰の上での媽祖神の重要性を述べ、詹東京媽祖廟会長は、媽祖廟の建立された大久保が「台湾街」あるいは「媽祖街」になることを祈念している。彼らの言葉には、台湾出身の華僑の

日本における活動、活躍が第一に述べられ、信仰を共有する大陸出身の華僑のことには触れられず、現在の国際関係の枠組み、台一中の関係为背景として、異国における宗教(的)な活動が展開されているものといえる。

日本媽祖会は、二〇一三年に、台湾を訪問し、馬英九總統に面会しているが、この折、馬總統は次のように、台湾と中国・日本との経済面での交流について述べている。

三年前に台湾と中国大陆が『兩岸經濟協力枠組み協議』(ECFA)に調印した後、台湾で生産された製品を中国大陆へ輸出する際に関税面で優遇されるようになり、日本と台湾の協力に有利な条件が創出され、日本と台湾が『投資保障協議』の調印に至った」と指摘し、また、今年四月一〇日にわが国と日本が調印した『台日漁業協議』が、四〇年に及ぶ双方の漁業問題を一段落させた」との認識を示した。

(中華民国(台湾)外交部発行『台湾ニュース』二〇一三年七月二五日「馬英九總統が「日本媽祖会」帰国訪問団一行と会見」<http://www.roc-taiwan.org/jP/ct.asp?xItem=404477&ctNode=1453&mp=202>、二〇一六年一月二日披見)

一九八〇年に東京を本部として設立された日本媽祖会は、東京媽祖廟の建立に協力し、祭祀にも関わるが、単なる媽祖神への崇敬団体ではなく、日本における台湾の権益を確保、増大させることを使命とする政治的な団体であることがわかる。

これらについて、政治や経済活動が、信仰や宗教を利用しているとみるのか、伝統的な宗教や信仰的要素を内包した政治(的)、経済のための活動とみるべきか、多くの諸事例と、事例ごとの関係諸機関・組織(と

きに国家)の利害関係等の分析が必要で、慎重に判断しなくてはならないが、前近代より継承され続ける信仰や宗教が、現代なお、現実の地域・場における社会活動、特に生活を成り立たせる経済活動の表象として、宗教施設の管理の権限、祭祀の実行が、大きな意味を有しているのである。

宗教・信仰、文化と、政治・経済の問題を、前近代からの連続性と、近現代の国際状況に目を向けて、総合的に考察してゆく必要があるだろう。

〔付記〕本論文は、科研基盤B「9、10世紀敦煌仏教、道教、民間信仰融合資料の総合的研究」(広島大学 荒見泰史教授代表)、基盤S「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究—人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」(名古屋大学 阿部泰郎教授代表)、及び科研基盤B「国民儀礼化する通過儀礼・年中行事の資料論的研究」(国立歴史民俗博物館 山田慎也准教授代表)の研究成果です。科研の、本調査、研究への支援を心より感謝申し上げます。また、長崎三山公帮をはじめとする福建華僑の皆様、崇福寺様、神戸関帝廟様と福建同郷会の皆様、京都華僑の陳正雄様、横浜華僑総会様はじめ、快く調査に協力いただきました方々に、たいへん感謝しております。心からの御礼を申し上げます。

註

(1) 獅子舞は中国各地に伝承される代表的な中国の民俗芸能であるが、横浜華僑による現代の獅子舞は、広東起源の南方系獅子舞をベースとして、一九八〇年代にシンガポール華僑より北方系の獅子舞を伝習するなど独自の工夫を加え、「横浜華僑獅子舞」とも言うべき独自の獅子舞を創出したことが、張玉玲により明らかにされている。張「華僑文化の創出とアイデンティティー—中華学校・獅子舞・関帝廟・歴史博物館—」(あるむ、二〇〇八年)、特に第三章「エスニック・アイデンティティの段階的發展 横浜華僑による獅子舞の伝承」参照。

- (2) 清国商人は、長崎到着後、長崎通事より、出港から到着までの航海の実情、清国の国情等について聴取を受けた。その聴取の集成が、江戸幕府に仕えた儒学者林春勝、林信篤等編による『華夷変態』である。『華夷変態』等を資料とする、清国商人の航海の実態、船上での媽祖祭祀については、別稿「清国商人の媽祖祭祀―日・清交易、航海と祭祀―」を予定している。
- (3) ベルリン国立図書館蔵「閩省水師各標鎮協營戰哨船隻圖説」は、Deutsche Digitale Bibliothek (<https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de/item/VOJR7QSCBZDGVW2L6MZVAP2BMQTYVD6J2>) (二〇一五年九月十三日披見) 写真資料が公開されている。
- (4) 『時中長崎華僑時中小學院史 文化事誌 1991』第三部、團龍美執筆「長崎華僑録」序説(時中長崎華僑時中小學院史 文化事誌編・発行、一九九一年)、及び、坂本夏実「長崎華僑における社会組織の歴史と変遷」(『文化環境研究』二〇一四年一月) 参照。
- (5) 崇福寺の行事への奉仕を主たる務めとなる三山公帯について「在日華僑の先祖祭祀、普度勝会の歴史と現在」(『HERITEX』vol.1 二〇一五年一月三十一日、名古屋大学大学院人類文化遺産テクスト学研究センター編、勉誠出版)、に福建福清出身の長崎新地の商人とする華僑組織や、特に一年の最大の年中行事「普度蘭盆勝会」における活動について詳細に論じた。
- (6) 裘曉蘭「日本における華僑・華人教育に関する研究―多文化・多民族社会に向けての教育の再構築と課題」(早稲田大学・博士論文・二〇〇七年)、等
- (7) 以下は、私の民俗学的なフィールドワークに基づく、戦後華僑文化の形成についての考察である。私の立場、関心は、個々人の生活の詳細や心意を明らかにしようとするものであるが、史実や口述のあり方から現代を主題とする、いわゆる「記憶論」を目指すものではない。私の調査に応じてくれた被調査者の口述は、調査時における被調査者の記憶と過去の意味づけ、再編といった側面が強いことは言うまでもないが、時間の推移にともなう変化と歴史を明らかにしようとするものである。
- (8) 新木武志「長崎の原爆被災と戦後復興」(第八回海港市国際シンポジウム(長崎大学、二〇一二年二月) ワーキング・ペーパー、長崎大学東アジア共生プロジェクトワーキングペーパー』No.10、二〇一三年三月)
- (9) 横浜華僑についての概説史でも、横浜華僑がGHQ(連合国軍総司令部)による物資配給の恩恵を受けたと記されている(『横浜中華街 150年―落地生根の歲月』(横浜開港資料館編、発行、二〇〇九年)「焼け跡からの再起」、財団法人中華会館・横浜開港資料館編『横浜華僑の歴史―横浜華僑口述歴史記録集』(財団法人中華会館、二〇一〇年) 横浜中華街一五〇年の歩み「焼け跡から世界の観光名所へ」等)。神戸において、GHQにより、戦後三年間、実施された華僑への特配については、戦争終結後に、華僑身分を証明する「華僑証明書」の発行や、本証明書や戦前からの「華僑登記証」(中華民國駐日大使館、または総領事館が発行)に基づいて、特配を受けるための「食料加配証」を発行されたこと、配給物資が、米・小麦粉・味噌・食用油・砂糖・魚の缶詰・米軍払い下げの軍服などで、約七〇〇〇人の神戸華僑が申請したこと、これらの物資が、戦後の神戸の経済復興を牽引した三宮高架下の自由市(ヤミ市)のなかで一定の役割を果たしたことなど、中華会館編『落地生根 神戸華僑と神阪中華会館の百年』(二〇〇〇年、研文出版)に詳しい(特に第四章、新時代の中華会館―戦後の復興と華僑社会)。本書には、「昭和二十三年十一月二十九日農林次官通帳、外国人に対する食料加配に関する件」を伝える「華僑総会告知」(一九四八年)の資料(写真)も掲出されており、戦後の日本国―GHQ―華僑総会の機構・組織関係や連携が知られる点でも貴重である。
- (10) なお、日中戦争時の長崎を含む在日華僑の苦難については、菊池一隆「抗日戦争時期における全日本華僑の動向と構造―大使館、および横浜・神戸・長崎各華僑の位置―」(『歴史研究』(大阪教育大学歴史学研究室発行) 第三九号二〇〇二年三月)、参照。
- (11) 長崎、神戸、京都の華僑による普度勝会については、前掲註(5) 松尾「在日華僑の先祖祭祀、普度勝会の伝承と現在」参照。
- (12) 本稿の主題、外国人の生業・生活や社会形成の問題から派生する問題であるが、この反日デモの挙行者、参加者が、いかなる思想信条、帰属、社会階層の人々であったかのかは、国際関係のなかで一般市民が、国家に管理されつつ、いかなる政治性を帯びた考えを持ち、いかなる行動をするのか、その実態の解明は、現代の文化研究の上からも重要な課題となろう。
- (13) 横浜華僑総会事務所、関帝廟の管理をめぐる大陸派と台湾派の華僑の係争の顛末は、本裁判にも関わった裁判官清水悠爾「日本大通りであったこと―20世紀末横浜地裁の3事件―」(関帝廟と横浜華僑編集委員会編『関聖帝君 鎮座 150周年記念 関帝廟と横浜華僑』、自在社、二〇一四年)に詳しい。また、松尾は二〇一六年に、本経緯について、一九二七年に来日した広東出身の華僑を父とする謝成発氏(横浜二世華僑、中華料理店謝甜記社長)よりお話を伺った。

(国立歴史民俗博物館研究部)
(二〇一六年三月一八日受付、二〇一六年八月一日審査終了)